

高校時代の知人の電話から

酒井 董美^{たむら}

筆者が高校時代を過ごしたのは70年近く前になる。県立松江高等学校（略して松高と呼んでいた）に入ったのが昭和26年（1951）4月であった。確か1学年14クラスあり、同期生が660名くらいいたのではないかと思う。そのころの高校は新制高校と「新制」という枕詞を付けて呼んでいたものだ。それは旧制高校があったからである。旧制松江高等学校が島根大学文学部に衣替えし、新制大学と呼ばれていたのと同じである。同様に中学校も新制中学校と言っていた。

話を元に返すと、余りにも規模が大きくなりすぎていた松江高校はやがて二つに分かれ、昭和36年（1961）に松江北高校と松江南高校になり、更に昭和56年（1981）には松江東高校が誕生し、県立普通高校は現在の3高校に至っている。つまり、戦後の高校揺籃期を筆者たちは過ごしたこととなる。

さて、タイトルの「高校時代の知人」とは、兵庫県豊岡市に住むN君のことである。今月7日の夕方、彼から電話がかかってきた。夫人が5月に急逝。年賀状欠礼の葉書に返礼したのに併せ、懐かしかったからだろう、思いがけない電話をもらったわけである。時間にして30分は話しただろうか。同期生の名前をいろいろ挙げて思い出を語り合ったが、筆者の印象についても話した。それによると真面目で口数が少なかったそうだ。

一方、彼自身については授業をあまりまじめに受けなかったという。午後になると学校を抜け出し、松江市内の三つの映画館を回って映画鑑賞に時間をつぶしていた。高校からは生徒指導部の山村先生が見廻りで、よく映画館にも入って来られたが、そのときは決して目を合わせず伏せていなければならぬ。先生は知ってか知らずか、そのまま見逃してくれ、学校内で出会っても何も言われなかった。映画館では端に座っている見逃しやすいため、真ん中の椅子に座ったものだと言っていたが、筆者にとってはまさに初耳のことであり、そんな高校生活もあったのかと、改めて感心して聴いていた。

筆者の思い出に残ることと言えば、図画の時間に外へ出てF君と画を描いていた思い出が懐かしい。彼は美保関町笠浦から通っていたが、家庭の事情でやがて単身大阪の富田林市へ去り、昼は働きながら夜間高校を卒業するという生活を送っていた。島根大学に入学した筆者は一度、彼を訪ねて富田林市へ出かけ、一泊したことがある。そしてそのまま時が過ぎていったが、何かの折、彼の消息をつかみ、今から数年前、横浜の彼を訪ねたが、それがいつだったのか、今となっては不明になってしまった。

この他の思い出としては、新聞部に入ったものの、上級生の対応に納得がいかず、辞めてしまった。帰宅後、わが家の近くの権現さん（須衛都久神社）の境内で、友人とテニスボールで二人野球に興じ、スコアブックまでつけ、近くに住んでいた筆者がそのノートを保管する役となったまま忘れていたが、平成25年（2013）11月にわが家で見つけ、複製しなおして関係者に配って懐かしがられた。それには昭和27年7月12日から10月1日までの記録が掲載されているので、高校2年生のころの記録ということになる。

考えてみれば、可もなし不可もなし、平凡な中にそれなりに楽しい高校時代を筆者たちは過ごしていたようである。N君の電話のおかげで当時を振り返ってみたのである。